



石像になった華丸

多くの市民に親んでもらえるよう、本経寺本堂前広場に設置された華丸石像。関係者のさまざまな思い入れ、こだわりが形になった。

◆たくさんなでてほしいワン!

コロリとしたフォルムの「華丸」石像は、思わず頭をなでたくなる愛らしさだ。石という素材からくる冷たさではなく、滑らかな丸さが手に優しく、むしろ温かみさえ感じられる。

石の姿でちょこんと座り、この地から動物愛護の精神が広がっていくことを祈りつづける華丸なのである。



たくさんの手になでられて



目の上のまゆのようなものは子犬の特徴だという。デフォルメとリアルが混在する

◆年月を経て、やがて完成する

華丸像は、大きくデフォルメされている一方で、背後に回ると、犬の背骨の出っ張りまでが表現されている緻密さに驚かされる。その制作にはさまざまなこだわりがあるという。

「腹が丸く手足も太い、子犬のような姿になっています。丸く大きい目のうえの眉のような出っ張りも、子犬にしかない特徴。多くの人に触ってもらえるよう砥石を使って丹念に磨きを入れました。人や自然が年輪を加えながら、義犬華丸の姿を徐々に完成させていくと信じています」と、制作にあたった長岡和慶氏は語った。



後ろ姿は生身の犬のよう



広い庭の一角に座りつづける

◆平成版「華丸」の生みの親 石彫家・大仏師、長岡和慶氏

まろやかで愛らしい姿の華丸石像は、愛知県岡崎市の工房で活動する石彫家の長岡和慶氏によって造られた。氏は22歳のとき、兄で仏師・石彫家の熙山師に勤められて石仏彫刻の世界に入る。東大寺・比叡山延暦寺・永平寺等、数多くの石仏や石像を建立、平成12年には滋賀県三井寺より戦後初、石仏では初の「大仏師」の称号を兄弟で受けた。細部まで妥協を許さない作風で、代表作はイギリス大英博物館に収蔵されるなど、国内外で高く評価されている。

